

毛詩文鑑

四



99

上

75

70

65

60

55

50

45

利
門
號
卷



贊類

辛卯文體第十八



津土和讚 辛卯仲夏小町桂兒 室內前贊

右五門後桂兒

并行讚 萬二帝贊

貪讚

貪讚

讚

讚

敏桂自讚 讀徒恭讚

ヲ

銘類

花桶銘 指本銘

萬年銘

旅硯銘

古硯銘

玉盆銘

贊頌

淨土和讚

親本聖人

彌陀名号唱へて信ひニコトニ得ル人ハ憶念ノ事中ニテ
仰願報スル事アリ祈言願不思議ヲ提ニテ御名
ヲ称スル往生ハ宮殿ノ中ニ五百歲ナレラ島トフ説給
狂云此讚ハ建長六平ニ五主人ハ十二歳ノ御作ナカ
和讚ニ帖ノ中ノ事を文ニシテ一部ノ大意ヲ知ラメ給
トソ但し憶念ト云ハ佈ノ他力ヲ云ヒサレタリ誠ニ
文章博達ノ家ラ出テ黒毛丸ノニキニ一室ヲ建給ル
本ヨリ安忍ノ法門ニシテ王侯貴人モ自己ノ智能ヲ愧ケ

張之本西モ他力ノ因徳ラモシヤ仰法ハ總ニ黒譯
乞予ラ趣ハス深ク信し高ク稱セヨトナリ

辛免婆小町贊

芭蕉庵

あふきあくへり義もむすへり筆もすむへりのんの
人ひがくはくへりいふあくへりすへりとてしゆのん
今こくよひもとたのひへりあう間とすむへりの
まくへりあくへり義もむすへり筆もすむへりの

さくへりあくへりやあくへりあくへりあくへり

狂云此一篇ハ短簡ナカラお箇ノ事ニ用イニ簡ノ義

ミラ用テ然モ其句ニシイツケタルマルハ墨モトモ墨語

古樂府ノ体毛似タラシヤ但レ北贊ヘ湖南モ院亭ニ在リテ

其繪ハニ井ノ定光坊ニ在リトフ

六玉川前贊

傳入草

唐の奉を虚し能む事無く王摩詵も
輶川の圖とあくまでもありやういふのくやつて在
りとすりてらとひそかにすむきはなく里
ちゆにて行ましにほんやうすくらじとくらじと
いわきとすく王維もとまつて十五年より

アアヨウシトシキニモトハアヨウシトシキニ
ミヌス落丁の風土瓦をのまよ玉川の圖にて有れ
奇人ももとと近きをさすかくは官士達人の蕭詞
と一體とあらかじめかかれてあらかじゆる代
名いと磨て煙霞の眸とくよもとがつてはる比
言う所とぞとらへてばとけ金中とあらかじめかれ
にまよ一向と訊ひしととくじ野傍を常とせぐ
のあらうて遊方行脚のねどひ、それへ六月の川流
高一とくよひとほんたうまく向ふ一ノ瀬、まくね
いり竹舟のらひ、まよ一尾と稱ひ、けがなみの

とつて、すこし遠くあるところをまよひ一里行つて向の
村へ行つた。そこでおとづれで月の出る夜風
中、いよいよまよひだつたので、おとづれの車の音を
きいて、まよひながら走り出でて、車の前を走りぬけ
て、一里ばかりのところをまよひ、つづけて向の
村へ入つて、けりかづいて、おとづれ車の音をきいて、
車が、まわらふ壁があるのかどうか、うなづいて、おとづれ
車の音をきいて、車の前を走りぬけ、車の後を走りぬけ、
と、よがりあがめ、まよひながら走りぬけ、車の後を走りぬけ、
まわどすとあがめのところ膳所の便へ、や向日端

とつて、すこし遠くあるところをまよひ一里行つて向の
村へ行つた。そこでおとづれで月の出る夜風
中、いよいよまよひだつたので、おとづれの車の音を
きいて、まよひながら走り出でて、車の前を走りぬけ
て、一里ばかりのところをまよひ、つづけて向の
村へ入つて、けりかづいて、おとづれ車の音をきいて、
車が、まわらふ壁があるのかどうか、うなづいて、おとづれ
車の音をきいて、車の前を走りぬけ、車の後を走りぬけ、
と、よがりあがめ、まよひながら走りぬけ、車の後を走りぬけ、
まわどすとあがめのところ膳所の便へ、や向日端

六月の後晩

向日未

田中の山と川と木とおもむくね村に日本の山と川と
木と川のあるところをまよひながら走りぬけ、
まわどすとあがめのところ膳所の便へ、や向日端

この口うたれこれへかみのるの共ニヤウトヒルハ人を吉
トシテアリハ一くふを人とかもうてあうりハ一あがや
ミトヨウラスの故あり。御云瓦丸すをモトミシキ
瓦上井の御川をねよかの宮みとれてもシテテ
主すはまよと毛すかがれ御川あり次もよのじ
地の名がよろでわたむけられ御川の宮の國より
宋の國ナリテ御川をばんあわらきもア川ありどもヒ
御の御川をばんと御布の内らへてほれまく壁
あり御川の御川をかのうとくひよ。金のうと
壁御川をある月の御川をうさの五と川の壁

スミキヌタのらくらくとよゆあまくわく見にらでさう
う玉川あらみをうそと御の奥うそと旅人のう
まされてしはやけんと太郎のあわくらひまくえの
いれ玉川あらりやくあらて御言のきくうかくと
うかくニ下和うそとまられて跋しひよくまくと
狂云此贊ハユ蘇よカ赤壁ニ效イテ前後ノよリ三題セハ
但シ壁場ノ油革トリソルシまハ前後ノ赤贊ハ清白鷗堂
ニ在リテ前篇ハ墨云ノはたテ後篇ハ雙挫格也
誠や舊行ニ去まエ草アリトハ此等ノ文法ニ頓歛ニ教
ヲ傳ヘスル隨類得解モ主ノ草ナラシカ前ハ仄ニ六作

石泉文庫ノ
ノ通ヲ演テ六通一賛ノニ薪水ニ詔ヲ結ニ後ハ速ニ玉
意ヲ起シテ跋ノニ号下ノ詞ヲ残セルニ三通ノ事意ハ
分明ニシテ前篇ハ以テ起結ヲ完シテ後篇ハ以テ虚實
ヲ知レシ但レト草ハ尾ふ山風キナリ五年ニ禄ヲ辞テ
僧トナルむモ堅固ノ道也トソ

我花譲

沈南伍

我が花譲の名の通するあきに就てのまゝの
事アリテ是れをひそみにみじかくほむね又疾て
ヨミーじてアシテ書のち室の雨夜ふす林ノ音
をかくよきモアリテアリモアリの字れりとアリテ
花至かくわざれまアリカハ花の最上あれどもに
云鶴絃の音をはきよきよきの音上あれどもに
大名の臣名の作アリテ休を褐弓の珊瑚ホウカとアリテ
やうけゆと圓と円せらるゝがくとよく殊ふうれりと
くのゆのくまかくまかくねやのくじがくす
まくまくすこの穴の稀アリトアリトアリ

本明文監ヘ

うちへタれのまわせ化るふとふりへらで一トもあがく
あまき旅まよあらわにたのまうわかむる一あまき
の月とてむくまほしもくわかとまくまくはま運をふの木屋
ちしますやうほての御草とくらひ事伍う花のうす
あまきのーはくへ花のふとめでせられぬをや室
ひづにあうそとまむかとくとやうまく津のまゆへくし
御草とく草敷せみるよすやあわとじ繩のひねりもく
さき一庵生うまきの花すく元の世安と五十寺の手紙
ステまとく角のまゆひだりく手をなわのまゆと
まわすてあとさくまくは使ひとせあふと手すの一庵書

さくにまきのまきのあらんむかげのまきのりへ松葉を
のむと御くわきくは衰あつひてあくまくとて山
のあく土窓のとと枕あくちがく行く頭とて
けせとゆの花とてあくまくとてまゆの胸
服うの鶴よとてあくまく人のいわあく花あくや
ふ花をさくもれてえくとく人の使とてくもくの
ふとくらむくまく一筋花のひくとて論語やら
あずれすしむかーられとあわの陳花へほゆわ語
やうじてほのくのをくたむらじあくまくわかな
百く鳥^{ハズク}のよむれ花向をこすく一りのまくじ

あれへあへてのくに用ひたまことなり。麁種の筆を會
と連うて所あへとももかくべーひくあさとの筆と
そそくへすゞまの附の用あつて、もやの人の筆とあら
もおもへて、けむらもて一せきえまほの筆の上
一蓮托生のらきうどもひつて也。

狂云此譜ハ全フ脚譜ニテ先ハ我枕ニヨニ題^{ミタマ}ラム
去レハ春ノ夜モ秋ノ曉ドリテ長短ノ情ヲ向ニ縮ケル筆
力・角在ラキスシ次ニ天鵝絨^{クシ}枕ヨリ大名ノ隠翁トハ
名言ニシテ殊ノ段ハ一篇ノ筆占ナリナレハ畫廊ノ面
詩三リ并朝ノ膝枕ニヨリ十二シ箇^ク故古又古立フ用也

歌ニ詞^ハト云ハ古ノ人之言ニヨリ過タラン事アリテ松^カトシテ
カよノ詞ニ連エテノ間^スラ含メルミラ脚譜ノ筆格ニシテ
一蓮托生ハ文ノ靈實ト知ルニ但シ仰首ハ大野木^{キニシテ}
別姓ハ佐藤ナルカ加納ノ城下ニ在ナラ^ス在キニシテ隠故ノ志
アリトワ

董一亭贊

金碧石川

セイ神農の像と云ひよて觀音君の手本^ハかく^スと
手のひくられ罪^ハる^スと云ふとあしり^ハ因性あく^ス
文所^ハ株々^ハあらわ^スト^ハられ^スと云ふと云ふあり^スと^ハ爲^ス
人^ハはもも^スと^ハほみ^スと^ハ書^ス帝王の内經^トおも^ス一^スみ

かの秦皇の圖ともよて我あひけへとせん
授様のきにあくまつたもあらねどあらねど
秦師の業とわざとく説くの圖とてすこに龍の臘道
くちのわらはさうるゆせりあやうひがて
し牛とげれてまやうりをとつて一ヶ圍を設置を
そむくこむへこむへじとしまふあつに
かわくとやくわざとがくわざにひきへいとくと
うきあくわざと詔て口せの豆々ほ瘤うべ
うち信とくときくらうえキと詔て口も、
そきのまことかとくとあくうと詔して

ひ帝のうちの醫術あるあくせきの事すれどや
く医の寧の術はくと御墨の使す詔もくじと
あくうらうニ論と詔て口ひくもあくうらう鎧と
くゆに川わなううて前と後よもと凡とくわ
右と左とていとくに御墨の使す詔と御墨
のやうに比とくと御墨とて天と一をくわ
まくし論のけくとくとくに、つとくモのちくで天と
董帝の有無を一決とくとくと論替の事と
くとて陳思のあくわせばくわ

狂云此賀ハ一体アリテ古文所謂論替ナリ此故三醫家

ノ冉物ニ封シテ勲クニ重ノ徳ヲ論至似テ實ハ擾様ノ新
古ラムヘナリ然レバ宣天ノ實有ナル牛鯨ノ靈血ナル
例ニ虛實ノ法アリト称スレ況ヤヒ固ノ或人ニ古未無極
ノ或人ラ聖子テ誠ニ文式ノ論キヨリ曲折深遠ノ体ヲ
尽セリ去レハ作者ハ山田ギナルカ別姓ハ鉢尾ニシ農ノ上者知
ニ往スセシチ醍醐ノ叢書トセリ陳思ハ其家ノ領主カミムラ
但レ上有知ヘ順カ和名ニ云ル有知ノ里ノ上邑ナリ

貪讃

鳥居人

在ナリ富ナリのとせのとせもわざりとよし急上

空のあ櫻山ノ加瀬代で空の下ノ貧乏の翁カミアリ
ビタヤドリ山廬ノ下ニシテテモアシテシテタ列は
今モナラヤリテアシヒキ草の森の下モ隠れ仰
ハヒトモアモアモトモアモウカトシテ松風の下モト
ヒテウタキトモアモアモトモアモウカトシテ松風の下モト
ミの四言アモアモトモアモトモアモウカトシテ松風の下モト
ヒテウタキトモアモアモトモアモウカトシテ松風の
至西とあらば伊吹このく一もてが上川より馬上移す
みつりと晴好雨壽の宵よりあまひあまひを極め

往月の情と凡て、猶もあまし極とあらずして
いつまやろとすよ人をえまく食とすよ人を
せうやく、食とすよ人あくまく御年下とあら
手鶴の形とほじ一ノ内へ用と消もよせり
静坐もまことにあく事となへゆとほせり

貪譲譲

東花坊

せよ不賣紙十郎、調トモ食と讀との如く
くじらをせよめり、すよ人とくすよ
ひと所うもんるとすよ人のをまく食とすよ

はれこれひにせの半レアヘ一草一物の私と仕
事心ひヤとせの半レアヘとも食にはめを業と
贋まで食とそりとせよあくまで食とあくとせ
ともうすよへきやうわざを取よみやうされても
西とひしもよきよあんまくもうて篤厚の根と
あくとせよあくとせとちくと富とすの付と富と
あくとせよ食とすのとすある一ノ内や馬上
木で食よみよくもくと食よあくと富と
さくわくとせよ

さんもとえぞれをすくへておきし作方へ音
ふあうてほのまへうとくま牛といひまわに准
よもんぐはせう様半あくまじいじくせきの
家とやくらで船と文子のまよ頭とかくわけ
ねえ祥にのむじ、眼とひそめらでますとま
りあくす布有のわのとくみくらトサルサ
内きのあくまくとまど博美のはのくとく
きくす全のふ茅とぢよあうりやんにくと
毫毛立ち船とほく西の風へれくるはくとく
とくの比の人のぬとく中よあくわまちじ

雜要トトコ森よりとて木船と帶とくろくとゆく
とくすらあんせりきの侵累あく天室よ葉
耀のなとくわくらうとくのよみの室をあくあ
くすはくとくわくとくわくとくわくとくわく
よくく金のふとくとくわくの浦へたかく
よくく葉のふとくとくわくの浦へたかく
王孫の袂ともむくとく葉の袖まよりあ牛
あくともく富士川の舟ひよの帆車かとく
ゑくふくとく山川場ありて廻内の方とくわく

と云へ一さうとひきの感なりに説へたゞまふす
のやうう意とまじこひまようまつて一と仰の向務
トがうともれ知明了の人とあそびけり人を能勝
危険とうそよふうう体とよれ人の體相とよへ滅明
和尚とあやまられ津くのえよといへ事生
ト足あらんよまくとせ伝うるる者と奉つよ
他と不善の凡難漢とやつて取られよし
人よのうと寢候のとわむうつてもうと雲は
のよまととての情態とくわづけて情極へ貪
ちゆうの所、うどん子提一味の多充つて仰高

佛家の法と云ふ、儒者、佛門の法ともいふにあ
る者の功と云ふべく、貪欲と貪著と云ふ、
それによまれる言をせがときわくよしく惟無
の貪をかくよしくて、よせよ惟無、かくよ
よくよしくよくよくて、惟無あくとよく
貪福の論契とすやうよくよくと

犯云け西讀ハ学貧ノニキヨク前篇ハ我雷下ノ詞ヲ極
後篇ハ玄サノ名言ヲ讀ス去レハ比讀ノ巻尾端ニ雷下ノ詞
名輩ナヨリ高ク儒仙ノ至論ヲセシ例ニ似詠ノ筆格
ヨリ例ニ虚實ノ自在ア見ヒレ或ハ奥穿ニ船頭ノ一對ハ

西行三天毫ノ仔ト知ルレ或ハ滅明和尚トハれモけんノ類ヲ
見テハ鉢ヲノ知ク甲ハシニ和尚ニミナハ勿解ラスル是ヲ又自
文法ニシテ他ノ日ハナル筆手カトリ宰我モ滅明モ家詔ニ付
アリ先ヘ此公扁ニ仰揚ノ法レハ結語ニ向ニヤフ人マニシトハ
四情ノ讚誇ニ及ハシん謂ナフモ此讚誇ノ奥義ヲ見シ先師
亡名ノ其ヌナハ惟悉ト同年ノ作ルシ但シ惟先ヘ

素生ナ

蚊柱自讚

蓑具角

蚊柱ノりよ豆のくに川一ゆゑ

ひうきくふてのほ花と遇まづくも次在よツ、リ

叶未來ヒアリテ晏猶入アシテシテ空窮の
ルシヒトミアリ

狂云北一章ハ懐ノ秉卯草ニ在リテ屏风ニ有葉ノ色鮮
參ニラ四子ノ題名ヲ加ヘテ例ニ壁場ノ洩色トナセリキハ
定五家鄉ノ事ニ春ノ夜ノ事ノ浮橋トタシテ葦ニ別レ横
雲ノソラトハ無心所育ノ所ニレテ北鄉ノ风格ハ千門万詠
居サルモ敷多アリテ皇子御世ノ句ニ至リテ「晝鳥」ノ曉近レ
比体ナルラ吾子モ一生玄ラスナリ故ニ彼カ仰詔ニ會於ノ哀ニ
キリくストニルハ春ノ曉ニ秋ラ思イ寄セタル詔ニ會於ノ哀ニ
未來ノ未來トハ是ラムシ但シ其角ハ武陵ニ置放ス亞也

被ヤヌ

讀徒然讀

江北房

西よりれくはまくらむと園を良基公の坐處
とみを伊豆入るよりてよもれ當附に至る下院
のおまきりにて二石又半又版より一石八分
ほきわくひうなむかき連化とし傷に充
の詠へとあて傷跡のあつてゐ人をも行へ在毛
山と画、紙くじらくお名とお名の意を行へて
作るの情をひゆ中とがくともうとしと書う山
東華房ありて藤園のあら辨所をば武藏

の而詠とや一丁ほれくの讀九巻とほくわく首
凡例大綱より別録ハ園公賢の薦々と廣の
或と三井の艶書の論とほくちや或と孟子の放
の比とあるとわざと古本の十五か十セ尋ハ覓
の豆ふうと余の二百四十金版も爲辨所と廣の
とんじんとくと金とくわくの折合ととすと
ほくちやと詠と大意とくとて太鼓と写十九版
一丁ほれく一版とて字のとびとび十度ハ二石半
七章ありそりと序文のわのとびとび路詠の字のす
と詠とくよ畢竟とて脣盤の一よ不詠とほんく

一部を亦寺の法語アソシテられ第ア御殿ノ法師の
一部アソリ諸おの人れヤトムシモコロヘ附ヨア幕好のや
情の御福裏裏殿とハシマセバテニ西のヤシヒニ
やさりに文也不到のアソバ西人孟秋のアソモリ
自己のアセトアソアスアソシテルシテ付讀の讀アソ
アソサシ物の聲と聲アソセヒシホシアソシヒアソ
ヘヒ幕降モトヒシヒシモツセシハシモト並好
の家法アソテ或アソシトテアソシモアソシモト並好
アソナリシモアソ是非アソ書教のアソナリ東北賊力ア
黒江のアソナリシモアソ長名の一段アソアタ致ヒアソ

ハシヒ好キのアソヌアソヒニ一部の慈意モ二串アソヒアソ
アソ詞をひく北風流アソシヒモヒト儒仕の阿シヒ
アソナリアソウモ竟理即のアソモアソヒ笑のアソ
アソ證アソヒト證モ金アソヤ

又云北證ハ徒然草ノ大意ニシテ文章ノ鼓舞ヲ用アソ
寔ニ其證ラ證ラ證スト云レ去ハ南向良基公トア觀應ア
ヒノ接相ニシテ伊予入道トア今河了俊アソ次ニ為辨物ハ
故禪閣ノ南書トヤ正平冬公ノ奥書ニテ正平文也一年ト
アソ去ルハ後花園ノ正時ナレレシモ此折ノ書ナシテアソ
書ク傳アストクタリ或ヘ云質ノ蘭太磨ハ全部瓦巻

ノ史書ナウトヲ其世ニ故アリテ減拔ナリト其簡ニ孟母
立ス跡ヲ載スルニ延慶ノ船ヨリ應安ノ末ニ總テハ
四手筆假ハヤウトヲ先レハ北護ノ通ハ徒然護ノ年文
クシテ嘉慶ノ下ニ通明セナラニ

銘類 花桶銘

雞立甫

ひきつへり一即のふとそくされせりか
のうひもれよ、つとくしみゆいも半な人
ひしー近かゝる様のうねと極アリてとまゐゆ
アレトアリ、てひづれまれ

右云此一之命ハ花桶記ナリト或人ノ命傳ニルヤ其桶名ヲ
古器山ト云ルニヤ然ニテ中筒ニ肩舌等ナシ置テ前後ハ
序詞ノ筆格アリヨリ是ミハ銘ノニキノ題セリ但し此作者ハ
中比ノ佛士ニシテ難トハ此人ノ家名トゾ

柳小舟銘并序

藤如行

ああややこかひのねのあをあらわすにち
もひれどもがのぼよこらるるれてはけあるよに所
よこれふとらへかわやとようわやあくせす
もせきよもやたむせのゆゑうじゆくほ
正氣

のまへーとが行かぬ廣さーのきよさーとが行
サラン
サランのたへかゝる毫毛とてはれての顎あひるの頭
うなづくのあひるの頭をかみほすが
さういふとてはるのあひるの頭をかみほすが
さういふとてはるのあひるの頭をかみほすが

うよかねにあらわされかゆはす裏と角あら
脚あひるの茎はとあんじうと年をかよるお
年トスリて江浦の傍と併進るとおもむくおと
の経緯とあひて鶴巣大怪の腰とあらわしや
あらわし版と神をつけてけふとては
はるあれ下葉のまちから

れれのまちを嘗てゆゆ

犯云此銘ハ此体ナリ幸ヨリ如行ハ裏懶ノ主産ニテ其舞ハ近豊
ナリトヨリ武名ヲ辭シテ澤流セヨリ是ニ秦端ノ詞ヲ知ルシ
然レハ此等篇ハ其身ア観シテセニ在ラバ誰アレ是取ラ道シ

トナリ吉ハ西向ノ譜譜ニ東ハ南陣キモトモ水平キモトモ大摺サキトノ
松詞ナルテ今ハ三十種ノ起詔ト十日レ前ニ能詔ノ筆下格ヲ得テ
舊門ニ先作者アリトミシ況ヤ其銘ノ酒工落タル溪ニ寒モハ
詩風ラ傳ヘテ寛ニ詰寒ノ曉ラムハナレ

着茶駄

西華館

裏里人やくらせ仰あつて仰て重ひ歌ト能詔モハれ
至る人や風流人やうり山林人等とよかす市す人等とおも
とおけんせんをつむあひあしよ能詔をゆむ能詔
首尾ナ内肆鷹扇の文子跡

甚しきとよあはいがゆかみ中庸の體しわがとよ
時事と國事とくをしてもよしにいれどもあはいとよ
えとや裏里人等とおとおし下西をりくとおちづ
筋と墨子とがりと重ひしらかねの今のよしとよ
内事のよのゆふとおきとぞとおとせぬとあもい
ゆととての着とおとくとよしめととくも
着とおとくとよしめとよしめとよしめとよし
とよしとよしとよしとよしとよしとよし
とよしとよしとよしとよしとよしとよしとよし
とよしとよしとよしとよしとよしとよしとよし

右云北銘ハ禹錫カ酒室ニ效ヒテモモノ句ニシテア韵ナリ但レ
著翁ノ丘丈子ハフタトニキ花十人削ニ毫詔ノ云イ捨ナフ
次ニ詩師以下ノ句ハモ西向ニシテ二句ノ意ナハ是モ禹錫カ
山水ノ四句ラメテ二句ノ意ナルニ效ヒテ次ニ然ラヘト後詩ヲ
置テ是ラ韵外ノ諸詔トセハ是モ禹錫カセ子ノ結詔
ニシテ總テハ長短ノ句法ラ罕イタル和漢ニ通用ノ文銘ニ
一子ノ私ナキア見ヒレまじヘ其銘ノ二人トハ外面ハ著翁翁ナ
ニ言可セテ御食鷹ニ呼ル、綠詔ナカラ爾師ハ同財ノ名ニ呼ヒテ
其財ノ家敵ラムルナラン嘴レテ松竹ノ對ナトミホト庭一ル
凡俗ナカラ毛若ノハ今明ニテ是ラ臍縫ノ豆叶法ト称ニ

誠ニ高廟ノ指讓ヨリ師矛ノ實訓ラ感ヌキヤ但ニ裏室
ハ大鳴年ニシテ蒲ノ倉敷ノ壇ナトヲ

旅祝銘

相左角

「正もよしのれと號ヒテ比ヒテモハヤハアリ。」
「正もよし虎の勢ヒテアリカス弊けと風也。」

忠政

「まきづわいわく」

右云此銘モ組シ一体ナリ筆墨ノニモヨリ龍虎ノ容ニ
寄セテ月花ノ一對ハ旅ノ夙情ト見ルレサルニ序詞

四句二韵ナルラ後ノ銘諸ニ云アツマケナル是ラモ首尾韵
ニシテ法格ハ千重一ロ能ナルシカ

古观铭 并序

李花馆

此家之观ありてその观を大石内蔵あはり瑞
のくれおはして玄の様あえわきて御
のち一の御印と云ふ今れやの體よりてもやエテ三
トトト向ひてにとてやむ一被をも御
文あらしやもす本屋と籠の地と仰き馬の上
觀事ととまとてたゞ内蔵と云ふと云ふと

塵下れ四十金くじかりと武の其角ノ内蔵と仰
と云ふ文武ふくよくす有都江流をそゆる
すちほして今りともあれとよへまじき縁や
观の乍れよそもしくてはくらむとくて隨
とくくくせのくばよ歎せの仰名よカとぞ
つひてせふと西廻るゝや
次をひきぬつねくしと内蔵のまゝ
ひやく次をつよきのとまゝ
ひやく

アハシニレ筆のとあるのこれあひて次の所
らひともとをりあすもお錦のもりとて所
御内の役どりとて忠良の人れどもくまに
あす。ほそせんれはくまくじよとぞへらす
の舟くわすむ。

狂云^ム銘モ長短句法ナカラ五章ニテ十句ハキニ三章
ハ六句ニテ二韻ナリ是ヲ首尾ノ韻ノ定法ト立ツシ前ニハ
著若^{ホコ}銘ニ古法ヲ守リ實ニヘ古破銘ニ新格ヲ用イタル
故筆ニ文鑑ノ公論ヲ知ヘレ但シ其題ヘ君子西口銘ニ
效^ル彼^ノ銘ハ六句ニモ左モ右^ノ韻ノ論ハ有ナヤラ^ノ附ニ

漢韵ノけは^ハ竟東ナレ^ハ君舟臣水^ハ自觀政西^ハノ詞
ヨリ總^テ文武ノ兩用ラニルニ花ノ木體^ハ忠度ノ事^ハ含^ミ
馬上ノ^{ホコ}別^{アハ}曹擇^ノ詩ラニ寄セテ和漢ノ文武ニ和漢^ノ詩辛^ニ
テ對^{セル}誠ニ文筆ノ神ニテ博知自在ニ發聲^{タシ}セアルニ
大石^ヤ忠^シ節^ハ文苑武林ニ名ラ称^{シテ}古今丰潤ノ武士^{ナシ}
或^ハ生前ノ文書ラコ尋^子或^ハ死後ノ調度ラ求^テ心アレ^ル
ハ私藏セリトワ但レ播東^ハニ國ニ佳木生^ハ播州ノキナリ

盃銘

傳玉草

ヒシテムクニ^ス月^トム^スあよ^トム^スアフ^スム

乃と之十と八あれんとや。

征云無銘ハ經簡シテ 韵ヲ用ニ奇はアリまんハ古人ノ調
借ツテ今人ノ讀ニ取合セタレモ一章ニ句を三似テ二句
ニ韵ナルホラ見ルレ況ヤ月花ニ星夜ヲ對セル看達自在
人ナルラヤ寔ニ星十夜八十ハ廿ニ盈ノ讀ニ星八十方ニ滿ヲ
盛ルク夜ハ八方ニト五ハナリ他レ廿年ノ銘類モ後朝ニ
音ニロシ紀納言ナト種々ノ體格ヲ足合スレ

序文題

庚午紀行

芭蕉云翁終平記
自造終平記

碑文題

雙林寺假名碑銘

弔文題

生身急急奉文

甲許士文

圖司空墓誌

日記類 芭蕉翁終季記

晋其角

おもくじとあるが、その内に、その邊に
風浪とさうやまと余人の間をあわてて走る。合信
そよ風と波とのゆきとあくびとくわくと勘定ふにあわ
天和の比あし武のまよをと急な難とかくれ潮ひづる
古とかかれて煙のすゝとのいじとそむのねのとこふ
くわくやまよと猶やたもの度とほくと應萬所住の
ふともかかつてそ次のとち甲斐の山里さんりとく
宣士のまのとれあれどやと更月下入山河と

「じすれ跡があつて、われはとくへは皆く下城京
の門よし居とひまひとうひととじよほと、一様の
芭蕉と桂とてやくあふるとすねと、そのせよが
時のひふれぐとみづけ芭蕉の名と呼ぶ。下に
國見さまの天籟和尚とや馬くづれかく、また
あけみのや卦とアラサギとア卦とあくわ
そくとれの跡とやくあふるもれてうきよでま
のとあけみと今けれあくからでせうあくまに
そくとれふれよとあつやうとせうあくが、ひだ
あくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

もるは御と神や聖典の諸々感一てかのまよ庵
入まふへんのたゞくらむとすあじとつすす
かく貞吉のむかし秋とちよかうりやかへ葉
しまづからふのくふとおきてとくとゆふ葉もわ
アモテヒシタのふわくまよかはよひの木葉
まちれゆね一かと行二寺の風とがくとくの
上西ヨシイハクハク山の仰と仰とさきの禪と
平生仰頂和高と嗣法もとさきの圓禪のは仰と
さされ一氣鉢鑄^{サツナフ}生とさくまちいふと見方と
くあくまく向とせかうひく笑かうと見方と見方

のぬり體とえられても海と並ぶの程すとてて會
をくまゐのく室禮と酒食^{シテ}一のくとててし
第はと能用あくあまつみと通事なあくニズニ西
あく西ノ東蓮寺跡のまくらに室禮と長毛と川又
通事載のまよ庵あつてひづれりせたのな人あく能
のまよ庵一とけあつてひづれりせたのな人あく能
あくらをたぐりへや慈鎮和尚の旅のせよと能
あくらとひづれりせたのな人あく能のまよ庵
あくらひづれりせたのな人あく能のまよ庵
あくらあくらのまよ庵とひづれりせたのな人あく能

と、うか、いはすらもあらずとおもひてはの國
あふくよアねれてたゞとやがおのほあつて、ちま
さしこむすも例より禮節の多くある。一、二月
長月のあたり、うつ病の多さをうれむ。二、三月
ちましやくも、うこからかうやうあきやうあが
くのすさまよせをほらまう。三月のすま
うすまう膳下の正色も、よそのすまゆす支那椎葉
や、うりに、よめうてとく。厨事の供給とて、
父、子によく、よのすまう膳下のすまゆす支那椎葉
もくじまくじかくとく。すまゆす支那椎葉

の脛とくじけでも、よのねぐりありとあくびられ
其角とあくべふねされてお泉の波の端とすほ
吹井のよのの角にはくいて十一のゆゑを取はばす
えをみのりおきつかはぬかくあやこ。ふくと
くとくうけも胸にされて、その病床ようから
げまとだまん坐あたとのよのうかふよやせきとがくと
つあく今を幸比のひがくといはばの御のひよ
ほくよやとかくうへくかくのうへて十二のゆゑ
時つうをがううりく、眠れると朝とてせせれ
いまがきをうかんぐくあまれうるうるうるお

ひそよ長桂のよき高人の事とよやうア
川船のよきよさとうにきりはまくあまくはな
事とよせよしと旅を爲したあれへとまくふよ
寧孫とけよやよ称るも觀法もよくとくのよ
よくよきのよよりきよのよも川ヤーとおと
かくこくて能活のいりうきうーふいふよのよを
まくよきよふよきよのむーおこりとよくとよりと
りやねがのすくはく遠く起のきうねのよ
よくよくあらまよすあらまよすてかくはく
よくよくわせひてあようせゆとよくよく

ものあらよせ跡よありわげくのあらよせうらよ
くくくせやるくよきよほち野とがみて休りんを
ゆくのよきのよみれすり湖南の義仲吉と信と敵て
近里遠境のふとけうくとよむううもせよひ
もよきことよくあく一墓をよろり歴の跡よとあり
てよひてよひてよひてよひてよひてよひてよひて
よひてよひてよひてよひてよひてよひてよひて
よひてよひてよひてよひてよひてよひてよひて
よひてよひてよひてよひてよひてよひてよひて

あきや鶴路の麻田家のあたきてて附上の月と映て
は扇ふの月とあれい遺骨もかくば地より
うへらういもくろうに立ちとも遠く风のきより
津ととよしはまよじ記とりて迎むの候

和云此記、桔尾花より集在リテ今ノ文トハ曾幾所
アリ。まハ狮子庵の遺稿ヲ見ルニえ禄乙支ノ眷カ武に
辞解ト對謙アリテ其後ハ書通ニ増減セシヤ贈合ノ書
ニセ吉支アリモ花實ノ評論ト見タリ

云ハ天和ノ急矢ヨリ故翁ノ生涯ヲ尽セルヨリ
大蘿ノ易ニ泥^{ナツ}ス况ヤ仙頂ノ禪ニ撲サル风雅自寂

身ニ行ヒ俳諧ノ酒^ラ落^ラ五音ニキメル其師ノ本懐^ラ尽^ラ
ト云古丈ナク其師ノ貴^ラ年^ラ傳^スト云古丈ナシ誠ニ^セ道^ニ
且^シ云羽アリテ且^シ云羽ニ^シけ房子アルラヤ或^シ能因^シ城^ト
イサヤト幻ニ誘ヒヌラ終^シ年^ラノ詞ノ文鑑ト云^シ僧シテ舟^シ夜^シ矣^ナ
息タ^スト終^シ年^ラノ詞ノ文鑑ト云^シ僧シテ舟^シ夜^シ矣^ナ
落月ノ霜モ其^シ夜^ノ明^シ方^ナランカ然ル^ナ記ノ墨^ラ云^ス
清カテシト始詔セル筆陣ニ风雅ノ暇アリテ^シ未^シ換^シ
三^ニ記セ^シ所ナラハミニ^シ菴子カ筆^カ知リテ就門^ニ
叶作^シアリト感ス^ヘ但^シ此記^ハえ禄甲戌^ノ冬^ナリ

庚午紀行

夙羅節

百骸九竅の中よりぬりかりよもつけて身に付て
よほせよこちむかへぬよばれやとよまを底すのちふ
ふもやあひ彼を役向とえやくよしもくはよる津
のゆきよとあつてあり内に倦んで放櫛をしる。其
みうけいもてへよかへんよそよがれのと非や觸
中よせくうへてそくあよかせくとももくかと
ほよとねくともせうあよさうれはてよのと
内とくじよくじよくよううのよきうづよひれよけの

和音カタキよおどる宗神の連手ハシよひる雪を舟の荷ハシ
利休の草車ハシよとまの曲カツまともうね。一ありまつた
川瀬カワセよふくわかれ。造化カツカヒよもくうひて叶カタマリとらふことを
ううあひよあきとつまもく。さすが月よあきと
よすすむ。よほほのひよあきうは夷カモシカ秋アキよひく
よのものもよあくもはまく。翁カモシカと、夷カモシカと
よく鳥糸カモシカとよあられ。造化カツカヒよもくうひて造化カツカヒよひく
さあくらべ比カモシカ月のわらのうよせうとよ
めと風まのけよあよふれく。て
旅カモシカくよおふようれく。よく

あつてはまつまつあじまつあつともまか軒の御
とおきてひめこ月の糧をあつもつて一枚のひらと
わざと御衣縫ふかくするの體すもとつまつあ
まくまくよからぬとして手をやれの定番といふよ
あうそ十船又折さずふ壁とまくまくと
折りありてり坐と寝てるがとあむけりぬあく
の前金をまくかくとせきりえぎりせきり
通記とふねと費え長めをと所附の尼の事と
ゆくい性とくしてうる節とくかく身と心うる
てせの糟粕とあくまじくあくまじくと

短方のそよ風をそてくらむほの日をあくまじ
暖てなとこねありかニヨリあつまく酒もくふく
わざわざと、萬々奇癡新のそくいよらむに
よすあれこれよだのあくの風をまくまくの往
くよかと山駿野卒北く一例もかくとそくの往
とかく風をものまくまくひかへておねまくまく
あふだむけりにあよすれに往詰みひくわく
の譲言へきくて人よかとそ軒セよかとじまくの
のそれよれおほき病とまくまくはくらむにま
にまどりまくらむに晴とまくまく社國の通緋とまく

てふくとす。農尾様の弓をもふんとき
旗内へてひややはせの旗をひ

とまつり十里的川よなよまうてじいとまふりで
とまつり承の里と馬かくと板づきのあらわと
弓輪うちうそとまわるを

牛引もとねつまと彦馬うす

わうわあまくぐくらひれと放よまの酒づくし今
まくもすみ難のぬまきとらむれり伴笑の古里と
まよ蘇とりとくと

川里や脇のよよほやの音

まくらはまくらの寝たてらうかまくらのむく
宿とまくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらのうに宿とまくらのうに宿とまくらの
あれとまくらとまくらとまくらとまくらとまくら
とまくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらとまくら

乾坤せ行同行二人

一即ち萬葉より檜木の
内四種坊

言葉とぞもよきとくとくとくとくとくとくとくとく

言葉とぞもよきとくとくとくとくとくとくとくとく

せうの高頭の傍よりはるかにあらやぢと
あ書のきとあれあわせしにて旅のりをあわせし
るのをかみてあれとあそびしれやの事
と解たるの如きとまくとまくとまくとまく
てなよどもあらゆるとねよく力ふるの事
とひくとひくとひくとひくとひくとひくとひくと
とひくとひくとひくとひくとひくとひくとひくと
とひくとひくとひくとひくとひくとひくとひくと

寫筆

高頭一とよか一神の御

騎上

やせたるつねとてかくす
吉郎のじよぶんとてかくすの近づけのまへと
じゆくとてかくすのまへとてかくすのまへとてかくすの
えりとてかくすのまへとてかくすのまへとてかくすの
まへとてかくすのまへとてかくすのまへとてかくすの
まへとてかくすのまへとてかくすのまへとてかくすの
まへとてかくすのまへとてかくすのまへとてかくすの

高野山

らむちむらむ

三月三日

いよとこその浦にて遊はる

せわうちを和音の浦にひはの國となりて浦ニ
ゆふのらふとてかくかくかくかくかくかくかく
くわの見ゆかくかくかくかくかくかくかくかく
てかくかくかくかくかくかくかくかくかくかく
上野が原をすむとあくとあくとあくとあくとあく
らよきのむらをくよアヒトウカのま川を
わにくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
わにくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

嘗のれども人へやうのも

えり草吹テ西吹テあく度吹テやうじてけらひこ
くつれてあくらよのむらをくかくかくかくかく
はあくとあくとあくとあくとあくとあくとあく
くとあくとあくとあくとあくとあくとあくとあく
あくとあくとあくとあくとあくとあくとあくとあく
とあくとあくとあくとあくとあくとあくとあくと
あくとあくとあくとあくとあくとあくとあくとあく
はあくとあくとあくとあくとあくとあくとあくとあく
とあくとあくとあくとあくとあくとあくとあくとあく

三本ともえもんや
がくはつう角あくどけよしめり

紀云無記ハ元禄ノ庚午ナラシカ四ニ傳ルモ多ケレ或乞丑紀行
トモエル其紀ハ貞吉字ノ叔ナレシ去ルア武にノ芭蕉ニ庵ニテ
紀行ヲ取捨レ玉ルハ元禄ノ辛未ト乙タヒ兩紀ノ文はラ取
合セテ此篇ニ成セリト乙ウホモ故翁ノ脅捨ニ文立章ノヌ故
ニア幻住庵ノ賦ト記上ニ通ノ遠イ凡知ラ度モ取捨
玉ヘルラ人ハ御歳レテ名傳フル故ナリ見ニ人ハモ丘換
五ハ紀行ノ婉麗ナル是ラ詩玉ノ人モ称レ是ラ連胤ノ文

予ニ左ル八芳野ノ花ニ至リテ一唱一チノ作ラナオヌ血ニ血フニヌニ
筆ラ絶タル是ラ文立草ノ墨會ニシテ是ラ文立草ノ起結ト
云ハスヤ左モ教師ノ碑又主此等ノ角文立草ラムヘルナラモ
ニ雜ノ句ノ古文ハ舊ノ行ノ年月ニ證句アリト鷄牛ノ句ハ雜体モ
エル或ハ猿面ノ貌ナフロ傳但レ世記ニ用レ所ノ故夏古語
ナト數多ナル中ニ芳野ニ接章ノニテハ誰ニカララン知ヌ
或ハ辛夷ト骨タルモアリホモ詩カニ奇ノ作者ナランホニハ世記
ノ結文ハ鷄牛ノ句ニ奇ノ奇ナレシテ其終ノ調ヘタルモ先ヘ紀行
續様ナカラニヤシト畫解ノ事イラ寄セテ唐半六十作
宋ニ始ヨリ人向一世ノ事ヲ幻ラ觀レタル例ニラ扁ノ骨ハ即ニ

近ク紀行ノ文鑑ト見ニレまし六社國ハ故而ノ無才ナニ不幸
短角ノ歎アリト故而ノ無才ニ角玉ヘリ奉生ハ尾城ノ今
トヲ組シテニ同羅防ヒ故名明ニシケン狂言ナカニ其精毛

世間

自造終季記

東行

今年ハ寛永辛卯の秋多クナリおひ坊より終季の
記とばくらアラシトおで仕事モナリを八月十六日也
サマ客ありシムアリテナラアリテ實多シゆゑシハ想
シム併ヨリアラシナリ御多シマチシアリシミ客ナリ
アラシアリシモナラニナリモナラニサセ

達磨トウササギトムス鷹とシテモ高頭ニ勝利の扇子と
さりに行園ニ一首の辛ビシトナリテトメの體の
ヤクシガタニシテナリムシナリカモモミト節の主事
生身トシ權者ノ不思議トシテナリシルハ陰峯
の坐駕立トモアモシムアレシムニミテ仕合シレ
モテ此ニ自在の萬能アリト蓋特アリカレシムシテ
裏化トシムアリ一機の守護モナリテヤマ鈴モナリシテ
アリムクセの人トモアシテ法トヨリアリシムナキアシ
ハシシタ生歌のヤシナリ舌も口もまくらアリシカ
往生の心トナリシ滅亡ノ心アリシテモトカヌ

一ニナのわかれとすをとひハシキ節がある事によ
りあへばせかうがまの心をもつたれみてもの
体の計とあともぢにはあらむト一ノカガリ内
の三毛蟲十匹を内向とすとまくテ西施と五郎アラフとある
うち十九をひがねる。一周ヒコを走耶ハタケトアリこれ、
魯ル公クン丘ヒラトアリ。よしよしと施をうけて
毛の下シタけをよしよしと危蟲の二年ニイわたりか
やふて身きのひのトアリはなし。筑ツクとありしと
みす玉タマあうて名を美酒ミョウの鑑カクとす。而
アリとや御おみぐをやうりて「ハキナ」ハキナとす。

トシノハシキのじからゆハシキトセトセと色のがまうと
ソアラタシアラタシと毛を指ササギキ産スル行ム入ルて代譜ダヒョウを
アトヒトモウアトモウ代譜ダヒョウをあつとモウヒモウ
アモのアモ代ダ阿ア義イの論ロンとけり。代譜ダヒョウがく星ヒメ
ア物モノ不ハズの情シヨウとぞとえ。星ヒメの始
されハシメ年ハシメセマスセマスアリ。身ヒメをね筋ヒメ筋ヒメトシ
トシのよほのよほとぞ。西ヒメをね浦ヒメをね浦ヒメトシ
南ヒメをね浦ヒメのよほとぞ。身ヒメの浦ヒメヒメ骨ヒメ骨ヒメトシ
身ヒメヒメの風ヒメみゆ中ヒメとあそひんと身ヒメの川ヒメ川ヒメ

ありてとせられしと御事の句ことと云ひ
す年の寶永の庚寅夏月にて斎川老の年六十あらずや
それと先年ハ俄譜の碑とまづてけりもてわざの事と
わざよかくしてせのえにかすらむてはる御清ひて
人ふ說てうに御と一様に一刀切とてよてはる風情の
二論より新たに書引とあへるに仰て種あつて種よ
論あへてとて論を角代の好西とあるとてその
せの字通つてとてよけの比の字もとと咬破なども
きく中よのわよくとくわくとくわくと所のえと
かくの字よしん阿みととやくせきの字よかく

オトモアシテアのふよかうも物よせなのは
古今のものゝしるべあるとやるるにあ年之ま
三月十二日う落のみ林まよ無名の碑とみてはるの處
手のひくとおどりてはまくと助念の字よか
あききさんぐと改めの字よとてとが國の墨山
と跡とくやく行へたれうさむに六一作と説きて
済はの変化をもらうてねじも西の書きよ風承の文
ととしてまほの字とをつれしより東華山とあく
西華山とあく御子庵とあく野籠すとあく俄譜と
工字の字やれりとあく野籠と似あくの字と

身一あらへどもあくまく非りあふとく風吹ちむづりて風情あり
コソ秋の下枝のをやふうんせ秋の上そよのちやあんじて
のれのわざくとと育の自に叶せのんじてらむ

和云記ハ其周カ齊物ヲ趣シテ題名ハ但し三編中ノ詞十
去ル起文ニ容名ニキヨリ容アケテ名ナキ物トハ是ヲ統玉
意トシテ有ル人ハ空より即破スレキヘシ編ノ故良又古語ニ
例ニ和渥ノ自在ナカラフ葱蘂ノ對ノ新奇ナラヨリ花鳥ニ
雲水ノ對ハ誠ニ世々篇ノ骨筋ニシテ我師ノ本情ハ此ニ句
ニ見徹スレ或ハ水ノ蛭トハ在中將季アリテ立陶ノ舌子ル
ヲ西行ノ季ト取合セタル是モ又閨ノ法トヤエハソロヒテヤ馬ニ

佳吉ノ古奇ラクテ佳吉ニ和季ノ名同ラクテ名全ク双対ノ
文法ト知ルレシ或ハ首葉葉ノ句評トハ我師ニ發悟ノ故アリエ
湖南ニ曲翠翠草ノ夜話ナルヨシ先ニ陳情表ニ此古文アリ或ハ
芳野山ノ一句トハ庚寅紀行ノ芳野郡ニヘ玉書ヨリモ草書
ニ悲レサ芳野山ト云ル我師ノ難句ニ隠士李東ト難陳ノ詞
テ故翁ニ芳野ノ癡句ナキ故ラ明カリ或ハ凡草句之情ノ論トハ先
テ甘葛ノ松草ラ撰シテ後ニハ續五論ノ拾遺返アリ總云辭譜ノ
理論ナリ或ハ今イヒ一經トハ我門ノ丘五律ラ註シテ一句ニ六
ノ姿情ヲ附方ナケアヒ三卷ラ一奇仙ニ附合セヌル八度ノ要化ラ
云ハリナリ但シ柳子庵ノ遺稿ニ在リテ書肆ニ山山オヌ然レハ三編

結文ニテ謗法皆空ノ所ヨリ眼ニ於ノ色ラトメ耳ニヘナ秋ノ音市
残セル是ニラ佛教ノ生滅自在ト云イテ是ニ文道ノ死活前立ト
云ニシ但ニ結詔ハ人丸ノ事ナカニ辞世ノ詞ヲ備ヒルニ

碑文類 芭蕉翁石碑 駒

序

東華館

我師ニ伊望の國ニシテ是應の元ノ藤堂の家
ノ門ノ前より之をれ比の臺とトモ今の中松尾
あくまく年々ノ年をとヤマモト武陵の原川
せとのあれでせよ芭蕉庵の名とくのりとモ
すみるアヌーそとて今れの事に

御詔をあそひてり御の後とおむとつす金一はす
ね所トウムカツシムスカシタハナムのアニ活
ミを富士トウマのアヌヨシテ五代ニテ此作
ニヒチトドクアヒトヒヅクの詞ニテ原宿にて
六三セの松ノ下にて御の浦ニセヒテアヒニヒ
キの意とアヒキテかの木こうきの木の下にナシ
の木を植エテアヒ事華山にヒ碑ヒテアヒ
アヒトモハ西川より原としもひてスモナカモ
ムヒ付ヒテアヒ

其銘

あ川さゝし 止すの國也 ふすまふ。
せよとす深め ひくひくとくに 人よあそに
あうへせば 言の事あらじよ あありて
せの玉川め みあやかの あうひぬき
くくてあれ さうひくとよ さうひくとよ
流てをあち るる川や じせこすの
とあくいゆす まの進あむ せのまこと
のれおれ乃 やうりき年 さあとくと
さうとくとよす まとかくの くよつる
えとあふ年の ひとへく。 差のゆくわ
まよとあらわす。

さうとくとよす まとかくの くよつる
えとあふ年の ひとへく。 差のゆくわ
まよとあらわす。

碑陰

維石不言
謎文以傳

狂云此碑ハ洛東ノ舞久林寺ニ在リテ頃荷西行ノ墓塚ニナラリ
但レ辛朝ニ般名ノ碑ノ始ナラシカ其ノ年ハ寳永慶元ノ春有
去レハ此銘ハ三十句アリテ起結ニ般名ノ韵ヲ用ルニ中间イ
六二句ハ七字ノ謎ニテ其三句ニモ首尾ノ韵アリ然レハ

序詞ノ故吏古語リ或故翁ノ行狀モ或ハ石碑ニ謎文語モ
或其銘ノ助語頸辭モ此等ニ軸ノ秘往ヲ加テ彼寺ノ
内陣ニ奉納スモモゼノ讖文ニシテ莫ニ註ルニ恐アラシカ
但レ矣詔我師カト清テ讀ムシ論語ニ參ク和吾道
ハト云ル人ヲ呼カケル語勢ナリト

圖司墓誌 幷序

野盤子

わみの國みよの様系ノ圖司かくとアヤシムのか
とゆアリテ是ノ有のゆヒトノ詔ミテ御店の向
山橋の左わきに近キヤリと塙壁ノ武の吉屋庵

ヨセシカドモアツ候の事などアリ也の御もて
アリて是のやう事へとすめの事もアリテ
あんちよらちわひの事とアリテ是の事
アリテアリトアリテ是の事とアリテ是の事
やアリテアリテ何の事かアリテ是の事とアリテ是
アリテアリテ是の事とアリテ是の事とアリテ是の事
アリテアリテ是の事とアリテ是の事とアリテ是の事
アリテアリテ是の事とアリテ是の事とアリテ是の事
アリテアリテ是の事とアリテ是の事とアリテ是の事
アリテアリテ是の事とアリテ是の事とアリテ是の事

人へありしもあらむわざとうむと徳と徳よいかう
あくべと寛とあづみもとづくまにてせの高野あくひ
せりを阿多くとくとされて徳と徳よの高野筆とく
まとくと筆とくとひて墓誌の情とく

富歎よりあれり筆のそれよ 墓誌

弓一のひもすとあこれまの下 沢庵堂

黒盤子

和云墓誌へ文部選三モ論アリ花生年月ノシテ詔レテ銘文
類トハ墨ナリトウエスト今ハ佐助カニ墓誌ニ致ルヤ序詞
舟二誌エラ山セリむモ後節アリキナリトセハ詔文ノニシテ

富歎天益遼カ詩ヲ含ミ花陰天西行ノ詩ヲ摘ミ天西之聲
力鳴ハ頓挫格トヨレ何モけ守ノ口授アリテ故翁が及文子ニ
世論アリ但シ圖司ヘ其姓ニテ名ハ呂セトカニヘル出羽國ノ御侍
アリトツ

弔文類

生身魂祭文

北七里

むづら難波のまこととてひせのほせやとゆづ
今とての浦の江前とよひてニ元の競走^{スハシリ}とく
あづらとれとせの人とあづらとくとくとくとくとく
唐ふとせきく名古くとくとくとくとくとくとくとく
名の唐ふとせきく名古くとくとくとくとくとくとくとく

いふ所に一物多あらずすちあよまげば其處へもれを
そと今幸ひのせ鯉の名よりて一カイの龍と作る
ナシの内は人との心もくらべやがま一また
御めつて其のふとあわらすまほんくもとくす
うれの意のほうもとさつれて一塊のまよあと通
かくよの因とあつてこにす金のまことか
うれし事魂の刺鰆サレサハよりて難波に射のるから
まじに伴船よ着走のものやみずし鰆の身の車をば
をかく龍とみゆきよ傳物ともさむれせよとす
氣尾まよのむとらりて一漏の水とたぐくも西南

このものもからりて強度の牽引するあじよく水回
うの風あれて麻木の毛根もからりて虚空を吹
らかすとくわくあくがくまく

和云川聲文比体ニテ中ニ兩箇ノ後名アリ是畢竟洋勢
ノ國ニ龍ノ一より留メノ謂たりましハ其魚ノ多名ナル
芦竹秋ノニモニ詔ヲ起シテ古き用ニ自在ノ所ナラン或ハ
鯨ノキ兜はすトヘ越後路ノ濱ニ敷きアリト寄鯨弔ヒ
トツヨハ弘慶モ越後ノ高山ナリ然ルニモ師ト云六先
彼ノ鎧亭ニテ我師ト之吟ノ奇仙ニ同作金花ニ一本アリ
二句同意ノ松段アリヨシ其花ヲ指シテ一木トハ云ルナ

七モリを篇ハ墨難ナニ似タト宣ミモノ用カシヒス刺繡ニ
寄ロテハ生見端ノ意ヲ結ニ舞ノ半身也サヘテ墨文ノ趣フ

頭ハス誠モ縦ハ横ノ体ナリ但ヒ段々其師ノ名ヲ勘破スレ

弔^{スル}許六^{スル}文

渡新^{スル}文

に年の許六と同雅の大剛の男トテ、首尾^{スル}佩詰の
旗といひサク、銅林^{スル}之妻^{スル}の子^{スル}と^{スル}リテ、佩詰の
玉^{スル}の佩士^{スル}と^{スル}御詰擅^{スル}子^{スル}の仰^{スル}と^{スル}、
殿心石肝^{スル}の太將トテ、一^{スル}と^{スル}人^{スル}病^{スル}ト^{スル}
云^{スル}方^{スル}キ^{スル}も^{スル}十^{スル}年^{スル}モヤ^{スル}の秋^{スル}月^{スル}日^{スル}

於^{スル}カヤ^{スル}アホ^{スル}、誰^{スル}内^{スル}の四折^{トスル}アホ^{スル}
カヤ^{スル}エヌ^{スル}能^{スル}モセシ^{スル}、と^{スル}可^{スル}の毛^{スル}馬鹿庵^{スル}
あ^{スル}シテ^{スル}本内^{スル}の別^{スル}の^{スル}毛^{スル}能^{スル}ト^{スル}モ^{スル}
キ^{スル}も^{スル}持^{スル}モ^{スル}アホ^{スル}時^{スル}も^{スル}シ^{スル}ぬ^{スル}義^{スル}の行^{スル}
アホ^{スル}ト^{スル}アホ^{スル}や^{スル}金^{スル}ト^{スル}アホ^{スル}書^{スル}ト^{スル}アホ^{スル}文^{スル}と^{スル}
武^{スル}アホ^{スル}ト^{スル}アホ^{スル}多^{スル}能^{スル}ト^{スル}アホ^{スル}人^{スル}、^{スル}事^{スル}
孟^{スル}耶^{スル}觀^{スル}の^{スル}事^{スル}と^{スル}アホ^{スル}役^{スル}本^{スル}事^{スル}と^{スル}西^{スル}壁^{スル}と^{スル}
カヨ^{スル}篇^{スル}の^{スル}能^{スル}書^{スル}と^{スル}アホ^{スル}正^{スル}は^{スル}其^{スル}角^{スル}作^{スル}と^{スル}
洛^{スル}陽^{スル}ま^{スル}實^{スル}と^{スル}よ^{スル}辨^{スル}諧^{スル}往^{スル}來^{スル}と^{スル}了^{スル}綱^{スル}
あ^{スル}アホ^{スル}と^{スル}本^{スル}の^{スル}作^{スル}不^{スル}作^{スル}と^{スル}アホ^{スル}人^{スル}も^{スル}に

本師事をもたらすより二か年の後アテ本師の作意
の法りをよんと作らんとすむ所の所たどりし其人を
作るの所、やあれへそと放ての直旨ありと考へふ
まゝ、其の即ひ即師トシムれど馬祖ハ非心
非仰トあくまづとく本師となほ人のうも所ど
破らうか何と言語の作不作とあくせりし海や
五老井又能書きとほくと墨とえりて天下の人北
元南とやうじて墨と紙と墨と紙と本師も
よのやせ一人トシテあくまづと西宮の世情と
それてそとニカキの本をいはゞくやられて寶手の

あふに延文延送の又大論ありテ筆陣の勝又墨と
金とアリ本師とその秋のまよのやがくとくまく
其のあまよとちうて能活の論と一せの唇はむら
うわく又三章のあくと面作の面作よりく其とて
本師と敵とほしや本師とて其ととおけん
やそと吊えの趣意アーテラと選場の然アトト。

柱云也等編ラ一部ノ結文トハ先師カウテ選文選ヲ思イ立テ
終ニ其古又ノ成ラスシテ曾ニ文鑑ラ選スル時ハ物ニ其人ノ名ニ
觸ルキラ今ヤ此延送ノ半端ニ到リテ其入ラ失ル古又ノ惜モ
尚惜ムキ故ニラ然レハ其篇ノ趣ハ始ニ韓信カ將擅ノ勇

二端一ノ次ハ陶忌カ胡床ノ瘡ラ歎ク總テハ文武ノ々能ヲ称ソ
是テ一ノ篇ノ趣焉十所セル折心亦仰ハ斯文ノ骨也即ト知
ルヘシましハ文聲ニノ異論トハ才一三文章ノ虛實ヨリ或ハ假名真名
ノ配ウラスイ或ハ句讀ノ長短ヲエイ或ハ和漢ノ法格ヲムイ或ハ
韵字ノ取立權ヲエイ或ハ辭類ノ差イラムイ或ハ文類ノ誤リヲ
エイ或ハ別傳ニノ虚聲ヲエル總テ人書面ノ體合ニソ本ヨリ
其家承ノ過ラドアラル其ニ争ニノ風雅ナランニ人ノ致亡虫ノ例ヲ
而世ニ又立草ノ法格ヲ知ズ知テ用イサル時ノ師範タラニモ阻レ
其人ハ本次川年ニシテ標号ヲラ而中トエイ別姓ラ五毛井トニシフ
通阿仲ハ法名ナリトワ

文部之類

往序

渡五口仲

あらかくのニテトトもひづく又體トツふんの勢也セ題
とあもとすててるの爲イヤムカわざるハナのよその徑
のくつあて古今のよき章の大綱とくじんよきとれ澤
のよき道とよきへしてけりあり向極めうて甚る
を澤よもやあくよのなよとけとよと語とぞう
字もく假ノの用とふとれと音と体もあとの形とよ
くいりて五ヶ條の用とよきの字がちてよ

假名とあらふとの配と音と連するの用とあれ軍と
行記の假名とまこと体行の文體もよほ一ノ片
やある詩とほくういわゆる辭とあるとあらず詩と
文體がさうよもじて本原より原の辭とよきわ
ふ文章の人ははもとづく辭と人偏のよし鼻とひ
てよし字をよみよみのあらとあらとひ文章の人や脊筋
よくよく詩と文體の類うへて辭と文體の差と
よくよく假名文體とほん枝ふ、花語下
花語上假名文體うへておれに仰か文釋
空と漢文あるとやまとくよくよくよくよくよく

奉に自集不^レ音^カまかふよ拾^ス書^ル集^ハ即^ハとく
あくともすあめの文體とくまじやあふ文體とく
そりと辞ふみちよまよあわくそくらひてあふれ
み移もあくんとそくらひ葉の假名遣^{ツカ}う詠書
の助語字あくとすくしよ文體とくがを軍^シの
様状^シよ和^ハ語^スの文^ハヒ^スいも^ハき^スと
和^ハ漢^ス文^ハ操^スれ^ハと^ハ本^ハ原^スき^ハうな^ハ集^ハとく^ハと
うと^ハ和^ハ漢^ス文^ハ情^スの差^スふあれ^ス歎^カわ^ハく^ハし
意^スと^ハ漢^ス文^ハ意^スを^ハう^ハ歎^カわ^ハく^ハし
とく^ハ集^ハと^ハ作^ハもの儀^スとく^ハ文^ス章^ス

かくすあくしんを假り又はまこととおもふ
えの書林よやうにアラシホトロス
とあらそと也

享保戊戌夏六月上澆

江戸日本橋三丁目

小川彦九郎

京寺町押小路橋屋

野田治兵衛

書林

